

活用事例	3 授業中に地震・土石流が発生した場合の二次避難場所までの避難訓練 【特色】崖崩れ後に発生した土石流への対応避難訓練		
学校名	美祢市立東厚小学校		
日時	平成25年11月11日（月） 中間時間・3校時		
場所	運動場及び駐在所前広場	参加者	児童・教職員及び警察署員

1 訓練のねらい

(目的)

地震発生による被害を想定した緊急の避難訓練を実施し、発生時に迅速かつ安全に協働して避難できる実践力や態度を身に付ける。

(児童のめあて)

- 放送、先生や職員の指示をよく聞き、無言であわてずに避難する。
- 地震発生時に自ら安全に避難しようとする事ができる。
- **お・は・し・も**の約束を守る。

2 訓練の概要

(1) 地震の想定

- ・ 震源は、山陽小野田市厚狭。震度5以上を超える相当の揺れが長く続き緊急対応レベル3に相当するもの。
- ・ 学校の側を流れる随光川が、上流の崖崩れによって塞がれ、平野部に増水した水が土石流となって学校側に接近している。
- ・ 地域的な特徴から、「**3**授業中に地震・津波が発生した場合の二次避難場所までの避難訓練」の津波を土石流の場合という想定に変更して行う。先般の伊豆大島での災害が、土石流が谷間を流れず、平地を流れたため被害が拡大した事例を基に計画している。

(2) 実施の手順

ア 緊急地震速報のアラーム音を流す。



児童は、どの場所においても瞬時に「**ものが落ちてこない、倒れてこない、移動してこない場所**」を探しそこに身を寄せる。

イ 地震発生（地震の効果音を、放送で流す。）

ウ 校内放送で、緊急避難の対応を指示する。

エ 一次避難の校内放送を行う。各自運動場に避難。運動場の児童は、運動場中央に南側を向いて集まる。（校舎を背にする）

昇降口、多目的ホールは地震のためガラスが散乱しているため、1・3年教室の運動場側の戸から学級単位で運動場へ向かう。



オ 震源は、山陽小野田市沖、震度6、マグニチュード8。地震による崖崩れのため随光川がふさがり、上方から平野部に濁流が流れ学校方面に向かっていくとの情報が入る。



- カ 児童は、二次避難として国道316号線沿いの学校近くの高地である東厚保駐在所前広場まで移動する。
1年生から6年生の順で移動する。



- キ 駐在所の方のお話、学校長の講話を聞く。



3 訓練の成果と課題

<訓練について>

- 津波の心配が少ない山間部にあっても地震発生によって様々な災害が発生することを児童に分からせ、災害についての基礎的・基本的な事項を理解させることが、今回の訓練の大きなねらいのひとつである。咄嗟の場合でも自分の身を守る防災対応能力育成の場としている。
- 本避難訓練の**最重点テーマは、児童に緊張感をもたせること**であった。
なぜこのような訓練をするのか、その意味を事前指導（訓練の日時は子どもに伝えない）及び事後指導において学級担任がしっかり指導する。また、校長の講話を担当が再話することにより、学年や発達段階にあった形で伝え、災害に対する心構えを構築させておくことが大事である。
- 防災の日に、全学級でKYT学習を行うなど、児童が、災害について正しく知り、的確に判断し、主体的に行動できる

ように時期やタイミングを合わせて計画的に学習している。また、教職員研修を行い、教職員の危機対応能力の向上も図っており、実践の場のひとつである避難訓練も本年度5回予定している3回目であった。反省や意見を必ず全職員からとり、次回に生かしている。



【成果】

- ◇ 緊急地震速報のアラーム音は、本校児童全員は初めて聞いたが、その場に立ち止まり、放送を聞いて全員が落ち着いて各自緊急避難の対応ができていたことから、日頃の取組が児童に身に付いてきていると感じた。
- ◇ 児童に災害に対して緊張感をもたせることを大きなテーマとした訓練であったため、避難中に私語や笑い声が児童から上がれば即座に訓練を停止し、再度行う予定であったが、児童は無言で真剣に行動することができ、危機対応力の定着に大きな成果があったと感じている。
- ◇ 防災教育は、日々子どもたちの生活の中にある。放送をしっかりと聴ける、移動など集団行動が並んで静かにできるといったことが緊急時に生かされる。今回の訓練を土台として、常日頃から防災への意識や態度を育てていきたい。

【課題】

- ◆ なんといたっても本校の大きな課題は、極少数の学校であり、教職員数も少ないことである。学校にいる教職員が期日や時間帯によっては1・2人ということもある。介助が必要な児童も在籍する中で、全児童の安全・安心を守るにはどうすればよいかということ常々考えている。
管理職だけでなく一人ひとりの教職員が的確に状況判断し、もしもの時には指示がだせる力を持つておくこと、児童が一人でも安全に行動できる対応力を培っておくことが急務であると考えている。